

龍樹造・中論無畏疏（前續）

寺本婉雅譯註

「觀燃可燃品」第十 (Agni-indhana parikṣā)

此に向て曰、火と薪との譬は必ず結合によりて火の如く、近受者<sup>①</sup>は我 (bDaḡ) なり、又薪の如く近受は五蘊にてあるなり。

此に釋せり、それ等は存するに非ず、何故に然るや、火と薪とは成せざるが故に。此に火と薪とは同一なるか、果た異なるかを成すとせんや、又二者の如きも能く成せざるなり。若し云何に云ふや、釋して曰、

①「若し薪は是れ火ならば、

作者と業とは一となるべし。」

//Gar-te (in-De Me Yin-Na/

/Byed-pa-po Dai Las sCig-hCgyur/

「若燃是可燃、

「若し薪なるものが火ならば、

//Yad indhanam saced agniṛ

作者則一」

作者と業との二に付て一性なるべし。」

ekatvam kartṛi-karmanoh/ (p.202)

/Wenn der Brennstoff Feuer wäre, so wären Täter und Tat eines./ (p. 60)

若し應にかの薪のみなる其者が即ち火なりとせば、作者と業とは一となるべし。何故に云ふや、火は作者となり、薪は業となることあるが故に、かるが故に火と薪とは同一なりと云はる、そは正しからず、云何に是れを思惟するや、火と薪とは異なりと考へば、それを釋すべし。

①「若し薪より火は異ならば、

/Gal-te Cii-las Me-g-Shan-na/

薪なくとも亦生すべし。』

/Cin Med-par Yan I-Byun-bar-h-Gyur//

「若燃異可燃、

「若し(火が)薪より異ならば、

Anyag ced indhanād agnit

離可燃有燃。』

火は薪なくしてあるべし。』

indhanād apy rite bhavet.// p. (203)

/Wenn vom Brennstoff des Feuer verschieden wäre, so würde es auch ohne Brennstoff entstehen/  
(p. 60)

若し薪より火は異性(Shan-Nid)にてあらば、斯くては薪なくとも亦火は生ずるに至るが故に、此の故に火と薪とは異性なりと云はるも、そは又正しからず。

① 近取者—漢譯受(Vpādāna)受者(Vpādātṛ)藏譯取(Ten-pa, Vpādāna)取の過去分詞(Shan-ba, Vpādātṛ)。

「觀十二因緣品」漢譯取(Upādāna)あり。

② 本偈譯—/Bud-Cin Gan De Me-Yin-Na/

又復

②「常に燃ゆるものとなるべし、

燃やすことなき因より生ず、

起す義なきものとなるべし、

是の如くならば業も亦なし。」

「如是常應燃、」  
「常に燃やされてあるべし、

可因可燃生、

燃やす因なきものとなるべし、

則無燃火功、

復起することなき義となるべし、

亦名無作火。」

是の如くならば(火は)業なきものなるべし。」

/Es würde immer aufflammen, es wäre nicht durch Anzünden verursacht,

Sain Anfang wäre zwecklos; wenn es so ist, ist es auch ohne Tat (akarmaka) (p. 60)

若し異性ならば常に燃ゆるものとなりて、燃やすことなき因より生ず。この故に又起すことの義なきものとなり、生と斷(捨)等を起す義なきものとなるべし。

又復(9.63a)

斯くならば業もまた無に墮すべし。其の業(用)は焼と煮等の總てのもの其等は無となるべし。そは是を思惟するに、何故に燃やすことなき因より生じ、起すことの義なきものに墮すべしと思惟する

//Rtag-tu ħBar-ba-Ñid-du ħGyur/

/ħBar-Byed Med-Pahi Rgyu-las-Byuh/

/Rtsom-pa Don-Med-Ñid-du ħGyur/

/De-I-tar Yin-na I-as-Kyañ-Med//

//Nitya-pradipta eva ayād

apradipānāhetukāh/

Punar ħrambha-vaiyarthyam

evaiñ ca-akarmakāh sati// (p. 203)

や。それを釋すべし。

① 本偈譯「燃やす因より生ぜす」

/Rgyu-las Mi-hByun-Shin/

② 本偈譯「是の如くあるならば」

/De-Ltar Yin-na………/

③ 「他に觀待(待四)なきが故に、

//g/Shan-la bltos-pa-Med-pahi Phyir/

燃やすことなき因より生ず、

/ñBar-Byed-Med-pahi Rgyu-las-Byun/

常に燃ゆるものにてあらば、

/Rtag-tu hBar-ba-Ñid Yin-Na/

起す義なきものとなるべし。」

/Rtson-pa Don Med-Ñid-du hGyur/

「燃不待可燃、」 「他に觀待せざるが故に、

//Paratra nirapeksatyād

則不從緣生、」 燃やす因なきものなり、

apradīpanahetukah/

火若常燃者、 復常に燃えてあらば、

Punar ārambhavaiyartham

人功則應空。」 起すものが無義のものとなるべし。」

nitya-dīptaḥ prasaṅgate // (p. 203)

/Weil nicht von anderen abhängig, ist es nicht durch Anzünden verursacht;

Wenn es immer brännte, so wäre ein Beginn Zwecklos/ (p. 61)

他に關係なきが故に、燃やすことなき因より生ずるが故に、常に燃ゆるものあらば、始起は義なき

ものとなるべし。

① 本偈譯燃やす因より生ぜす

/pBar-bar-Byed Rgyu-las Mi-pByun/

④「そこに若し是れを思惟するに、

燃えつゝあるときを薪なりとせば、

//De-la Gal-te hDi-Sñam-Du/

/Sreg-bShin Bu-Çhi-Yin Sems-na/

「若汝謂燃、

「若し燃やさるゝ薪が、

/Tatra etasmād idhyamānam

名爲「可燃者」

其處にあるならば」

indhanain bhavati cet/

/Wenn da (jemand) meint, das Brennende eben sei der Brennstoff/ (p. 61)

其れを釋すべし。

④「爾時、其れの上にそれ(薪)あるとき、

何によりて其の薪を燃やしなすや。」

/Gan-Tshe De-Tsam De-Yin-Na/

/Gan-Gyis Bu-Çhi De-Sreg-Byed//

「爾時但有薪、

「それのみあるとき、

/Kena edhyatām indhanain tat

何物燃、可燃。」

何によりてその薪が燃ゆるや。」

tāvannātram idam yadā// (p. 204)

/Wenn es nur das ist, wodurch brennt der Brennstoff? / (p. 61)

爾時かの燃えつゝあるときのみ、かの薪あり、その他を具するが故に亦燃えつゝあらざれば、火は

何によりてかの薪を燃やしなすや。

火が無くとも薪あることに墮すべしと云はるゝ義なり。

又復

⑤「異ならば會合せず、會合なくば、

焼かれず、焼かれずば、

消えざるべし、消えざれば、

自の相を具して住すべし。」

「若異則不至、 異ならば至らず、至らざれば、

不至則不焼、 燒けざるべし、燒けざれば、

不焼則不滅、 消えざるべし、若は消えざれば、

不滅則常住。」 自相を有すべし住すべし。」

/Wenn verschreden, (so ist) nicht Erreichen, wenn nicht

Erreichen, (ist nicht) Brennen; wenn nicht Brennen,

Ist nicht Erlöschen; wenn nicht Erlöschen, dann beharrt

① //gShan-Na MI-Phrad Phrad Med-NA/

/Sreg-par MI-hGyur MI-Sreg-NA/

/hChi-bar MI-hGyur MI-hChi-NA/

② //Rañ-gi Rtags Dai-Idan-par-g'Nas//

//Anyo na prāpsyate 'prāpto

na dhakṣyaty adahan punah/

Na nirvāsyaty anirvāṇaḥ

sthāsyate vā svālingavāñh// (p. 205)

(eig steht) es mit seinem eigenen Merkmal behaltet/ (p. 61)

火は異ならば薪と會合せず。何故に云ふや、無關係を成ずるが故へなり。會合なくば薪は燒けざるべし。消えざれば自相 (Rah-Gi Rtags) を具して住すべし。

① 本偈譯「異なるが故に會合せず、會合なくば」

/gShan-Phyir Mi-Phrad phrad-Med-Na/

② 本偈譯「又自相を具して住す」

/Rain-Rtags Dan Yin Ldan-par-gNas/

此に問て曰、火は異ならば薪と會合せざるべしと、彼の釋に付て説くべし。

⑥「若し又薪より火は異ならば、

① //Gal-te Cih-Las Me-gShan Yan/

薪と會合するに適すべし、

② //Cih Dan Phrad-du Run-bar-hGyur/

應に女は男と(會合し)、

③ //Ji-I-tar Bu-Med Skyes-pa Dan/

或は男は女と會合するが如し。」(p. 63b)

④ //Skyes-pahan Bu-Med Phrad-pa-bShin//

「燃與<sub>三</sub>可燃異」

//Anaya eva-indhanād agnir

而能<sub>三</sub>至<sub>三</sub>可燃

indhanani prāpunyād yadi/

如此<sub>三</sub>至<sub>三</sub>彼人、

Strī sañiprāpnotī purṣaṇi

彼人<sub>三</sub>至<sub>三</sub>此人。」

purṣaḥ ca striyāni yathā// (p. 206)

/Wenn vom Brennstoff das Feuer auch verschieden, so

ist es doch fähig, den Branstoff Zn erreichen,

Wie das Weib den Mann, und der Mann auch das Weib erreicht/ (p. 62)

若し又薪より火は異ならば、薪と會合するに適すべし。應に女と男とは異性なるも、又相互に依りて會合に適するが如し。此に釋すべし。

①、②、③、④—本偈譯との相違は左の如し。

「應に女と男と、

或は男と女との如し、

若し、薪より火は異ならば、

薪と會合は適すべし。」

//Ji-Irar Bud-Med Skyes-pa Dan/

/Skyes-pukun Bu-Med-pa-bChin/

/Gal-te C'in-Ias Me-g-Shan-Na/

/C'in Dan Phrad-par Run-par-ŋGyur//

⑦「若し火と薪等は、

相互に離れてあらば、

薪より火は亦異なるも、

薪と會合するを欲すなり。」

//Gal-te Me Dan C'in-Dag-Ni/

/gCig-gis gCig-ni <sup>①</sup>gSal-Gyur-Na/

/C'in-I-as Me-g-Shan-Nid Yin-Yan/

/C'in Dan Phrad-par hDod-Ia-Rag//



「若謂燃可燃」 「若し薪と火とは

//Anyā eva indhanād agnir

二俱相離者、 相互に離れてあらば

indhananī kāmam apunyat/

如是燃則能、 火は薪より異りて

Āgnindhane yadi syātām

至於彼可燃。」 それは薪へ任意に至るべし。

anyonyena tīraskṛite // (p. 206)

/Wenn Feuer und Brennstoff voneinander ausgeschlossen sind (tīraskṛita),

Dann mag das Feuer, wenn auch verschieden vom Brennstoff, den Brennstoff erreichen/ (p. 62

若し火と薪とは男と女との如く異り、相互に離れるときは、薪より火は亦異性にてあるも、薪と會合を欲すなり。

何故ぞ、是の如くならず、この故に汝が若し薪より火は亦異なるも、薪と會合するに適すべしと云へる彼の凡ての説明は正しかず。

① 本偈譯、 bSal-Cyur-Nā.

此に問て曰、薪に觀待して火あり、火に觀待して亦薪あるが故に、薪と火とは觀待を有して成すべし。此に釋して曰、

(8) 「若し薪に觀待して火があり、 //Tar-te Cīn-bl̄hos Me-Yin-la/

若し火に觀待して薪があるならば、

/Gal-te Me-bl-tos Cih-Yin-Na/

何れにも觀待する火と薪とは、

/Gani-la bl-tos-pahi Me Dai Cih/  
①

・初に成するは何れなるや。」

/Dai-por Grub-pa Gai-Shig Yin//

「若因可燃燃」 「若し薪に觀待して火があり、

//Yadi indhanam apeksyāgnir

因燃有可燃

若し火に觀待して薪があるならば、

apeksyāgnin̄ yadi indhanan̄/

先定有何法

何れか先きに成立し

Katarat pūrva-nispannain

而有燃可燃。」 何れに觀待して火あり、薪あるや。」

Yad apeksyāgnir indhanan̄// (p. 207)

/Wenn vom Brennstoff abhängig das Feuer, wenn vom Feuer abhängig der Brennstoff erreicht wird,

Welches ist das zuerst Erreichte, von welchen Feuer und Brennstoff abhängig sind?/ (p. 62)

若し薪に觀待(待因)して火あり、火に觀待して薪あるならば、何れにも觀待して火あるべし、若しは

薪あるべし、この二の中より初に成するものは何れなるや。そこには是を思惟するに、初に薪を成す

るが故に、それに觀待して火ありと考へば、それを釋すべし。

① 本偈譯「何れに觀待して火と薪となるや」 /Gai-la-bl-tos Me Dai Cih-pGyur./

⑨「若し薪に觀待して火があるならば、

//Gal-te Cih-bl-tos Me-Yin-Na/

火は已成なるが故に能成すべし。」

/Me-Grub-pa-la Sgrub-par-ñGyur/

「若因可燃燃、

「若し火が薪に觀待して成立せば

//Yadi indhanam apeksyāgñir

則燃成復成。」

已に成立したる火の成立あるべし、

agneh siddhasya sādhanan/ (p. 207)

/Wenn vom Brennstoff abhängig das Feuer ist, so ist Erreichen das erreichten Feuers/ (p. 62)

若し薪が初に成ずるが故に、それに觀待(待因)して火があり得るならば、斯くては火は成じ已つて復能成せらるゝとあるべし。又復、

(9)「又燃かるゝ薪の中に、

/Bud-par Bya-bahi Ćin-la Yan/

火は無となるべし。」

/Me-Med-par-Ni ñGyur-ba-Yin/

「是爲可燃中、

是の如くならば又、

/Evani Sati-indhananñ cāpi

則爲無有燃。」

火のなき薪もあるべし。」

bhaviṣyati nir agnikañ// (p. 207)

/Der Brennstoff (eig. das zu verbrennende Holz) wird es auch ohne Feuer sein/ (p. 63)

是の如くならば薪の中には火は無となることあるべし。そは欲せざるが故に、この故に火と薪とは觀待を有して成ずと何れも言へど、そは正しからず。

此に問て曰、(p. 64) 其等は何れも又初に成せされば、亦相互に觀待を成すべし。此に説明せり。

(10) 「若し存在が何にかに觀待して成ずるとき、

又其者に關係することによりて、

觀待せらるべき凡てのものは其を成ずるな  
らば

何に觀待して何ものが成ずるや。」

//Gral-te dNos-po Gan-bl-os-hGrub/<sup>①</sup>

/De-Nid-la Yan bStos-Nas-Ni/

/bl-tos-Bya Gan-Yin De hGrub-Na/

/Gan-la bl-tos-Nas Gan-Shig hGrub//

「若法因待成、

「存在が(何にかに)觀待して成立  
すること、

是法還成待、

其者に觀待して(何にかは)成立  
する、

今則無因待、

若し觀待せらるべきものが成立  
するならば、

亦無所成法。」

何ものが何に觀待するや。」

//Yo 'peksaya sidhyate bhāvas

tann eva-apeksaya sidhyati/

Yadi yo 'peksitavyah sa

Sidhyatāni kam apeksya kah// (p. 208)

/Wenn von eben den Ding (bhāva), das abhängig erreicht wird, (jenes andere) abhängig ist,

Von wenn abhängig wird was erreicht, wenn das, was abhängig zu machen ist erreicht ist? (p. 63)

若し成せらるべき存在(漢譯)の總ては、他の存在に觀待(因)して成じ、又成せらるべき其の存在に觀

待して、觀待せらるべき他の存在の彼の總てのものを成せば即ち招呼の語なり、されど成せんこと

を欲するものに何に觀待して何を成ずるや。

① 羅什譯一法 bhāva (物、事、存在 dNos) 獨譯 Ding (物)

② 羅什譯一因待、

又復

(11)「觀待して成ずる總ての存在は、

其れが成せざるとき云何にして觀待するや、

云何に成するに由て觀待すと云は、

その觀待は正しからず。」

「若法有待成、 觀待して成立する存在は

未成云何待、 未だ成立せざるとき云何に觀待するや

若成已有待、 或は若し已に成立して觀待するならば

成已何相待、 其ものゝ觀待は不合理あり。」

/Wenn ein Ding (bhāva), das abhängig erreicht wird, nicht erreicht ist, wie ist es abhängig?

Wenn (man) aber (annimmt) : erreicht ist es abhängig, so ist es nicht richtig, daß es abhängig

ist / (p. 63)

云何なる存在も、他の存在に觀待して成ずと稱せらるゝ彼の存在は成せず、無ならば云何ぞ觀待せ

//dNos-po bltos hGrub (rai-Yin-pa/

/De-na-Grub-Na Ji-I-tar bltos/

/Ji-Ste Grub-pas bltos Çes-Na/

/De-ni bltos-pa Ni-Rigs-So//

//Yo 'peksya sidhyate bhāvaḥ

so 'siddho 'peksate kathani/

Athāpy apeksate siddhas

to vapeksā-sya na yujyate // (p. 209)

しめらるや。

① 本偈譯 /Ci-Sie Grub-pa blTos Ces-Na /

(12) 「薪に觀待するも火なく、

薪に觀待せざるも火は亦なし、

火に觀待するも薪なし、

また火に觀待せざるも薪はなし。」

「因<sub>レ</sub>可燃<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>燃<sub>ス</sub>」 「薪に觀待するも火なく

不<sub>レ</sub>因<sub>ニ</sub>亦<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>燃<sub>ス</sub>」 「薪に觀待せざるも火なし

因<sub>レ</sub>燃<sub>ニ</sub>並<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>燃<sub>ス</sub>」 「火に觀待する薪なく

不<sub>レ</sub>因<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>燃<sub>ス</sub>」 「火に觀待せざるも薪なし。」

/Vom Brennstoff abhängiges Feuer existiert nicht, vom Brennstoff nicht abhängiges Feuer auch

existiert nicht, (p. 63)

Vom Feuer abhängiger Brennstoff existiert nicht, von Feuer nicht abhängiger Brennstoff auch

existiert nicht / (p. 64).

//Çin-la blTos-Pahi Me-Med-De/

/Çin-la Ma-blTos-Me Yan Med/

/Me-la blTos-Pahi Çin-Med-De/

/Me-la Ma-bTos Çin Yan Med//

//Apekṣa-indhanam agnir na

na-anapekṣya agnir indhanam/

Apekṣya-indhanam agnir na

na-anapekṣya agnir indha nam// (p. 209)

是の故に是の如く正理は前に與へられたり、云何に如實に従ひて分別するとき、薪に觀待(待因)するも火はなし。火と薪とは所成と不成等に觀待することは認むべからざるが故なり。薪に觀待せざるも火は亦無し、そは他に觀待なきものと燃やすこと、なき因より生ずると、常燃とに墮することゝなるが故なり。今は火に觀待するも亦薪無し。かの火と薪とは所成と不成等に觀待することは(サ、カ)認むべからざるが故なり。火に觀待せざるも亦薪なし、彼の火無くして焼くときなく、薪あらざるが故なり。

① 本偈譯「火に觀待せざるも亦薪なし」

/Me-la Ma-Blos baahi Ciu Yan Med/

又復

(13) 「火は他より來らず、

//Me-ni gShan-las Mi-Hoi-Ste/

或は薪中に火は有ることなし。」

/Ciu-lahan Me-ni Yod Ma-Yin/

「燃不餘處來、 「火は他より來らず、

//Agacchaty anyato na-gnir

燃處亦無燃。」 火は薪中に存せず」

indhane 'gnir na vidyate/ (p. 210)

/Feuer kommt nicht von anderem, ein Brennstoff auch existiert Feuer nicht./

火は他より來らず、他より來ると分別するも、そは又薪と共なるか、若は薪なくして來ることは認

むべからざるが故なり。薪の中に火の有ることなし、縁すべからざるが故に、而して起ることは無義となるが故なり。

(31) 「已去と未去と往とに由て

/Soh Dai Soh bGrom-pa-Yis/ ①

是の如く薪の中に餘のことは説かれたり」

/De-bShin C'in-la I'hag-Ma-bStan// ②

「可燃亦如是

「此に薪の中に餘のことは、

/Atra indhane Cesam uktram

餘如去來說。」

往と已去と未去(品)中に説かれたり」 ganyamāna-gata-agataih// (p. 211)

/Durch das Gegangene, das (noch) nicht Gegangene, das Gehende ist das übrige auf Brennholz

(Bezügliche) dargestellt (uktra) / (p. 64).

是等の種相に由て是の如く又薪中に餘の説明を教示せられたるを了解すべきなり。云何なる種相に由て云ふならば、已去と未去と現去との諸相に由てなり。應に已去と未去と往との中には現去なし。是の如く薪の已焼と未焼と現焼の中には亦焼なし。應に已去と未去と往との中に現去の初なし、是の如く薪の已焼と未焼と現焼との中に亦焼の初なし。應に現去者と未去者と已去者に於て去かしめず、是の如く焼者と未焼者と已焼とに於ても亦焼かしめず。是の如く諸餘も亦説くべし。

①、② 本偈譯第一句、第二句との相違(觀去來品第 二、參照)

「其の如く薪の餘は、

/De-bShin C'in-gi I'hag-Ma-Ni/



已去と未去と往とに由て説かれたり」

/Sōi Dai Ma-Sōi b'rom-pas b'San/

已去、

Gata, Sōi ; Das Gegangene.

未去、

Agrta, Ma-Sōi ; nicht Gegangene.

往、

Ganyamāna, b'rom pa ; Gehende ; 漢語 去時

現去、

Gamanāni, ĩGro-Ba ; Gehen ; 漢語 去時

### 又復

(14) 薪そのものは火に非ず

//Çin-Nid Me-Ni Ma-Yin-te/

薪より外に火も亦なし

/Çin-I-as s'Shan-la Me Yin Med/

火は薪を具するに非ず

/Me-ni Çin-Dan-I-dan Ma-Yin/

火中に薪なし、此れに彼なし。」

/Me-la Çin-Med Der De-Med//

「可燃即非燃、

「薪そのものは火に非ず、

//Indhanāni punar agnir na

離可燃無燃、

薪より他處に火はあらず

na-agnir anyatra ca indhanāt/

燃無有可燃、

火は薪を有するに非ず

Na-agnir indhanavān na-agnāv

燃中無可燃。」

火中に薪なし薪中に火なし。」

indhanāni na teṣu sah// (p. 211)

/Der Brennstoff ist eben nicht Feuer, ausserhalb des Brennstoff ist auch nicht Feuer,

Das Feuer ist nicht mit Brennstoff behaftet, im Feuer ist nicht Brennstoff, in diesem ist nicht jenes/ (p. 65).

更に薪のみありそのものは火に非ず、作者と業等は同一の過失に墮するが故なり。薪より外に又火なし、他に觀待(關係)すること等の過失に墮するが故なり。火は亦薪を具するに非ず、火中にまた薪たし(薪中)に亦火なし、他性の過失となるが故なり。

(15)「火と薪とに由て我と、

//Aṅg Dai Āi-gis bDag Dai-Ni/

取との一切の次第は、

/Ñe-bar-bSṅai-baḥi Rin-ba Kun/  
①

瓶と繪等と共に、

/Bum Snam-lā-Sogs Ihan-Cig-tu/  
②

残りなく説かれたり。」

/Aṅ-lus-par-ni Rnam-par-bCad//

「以燃可燃法、」

//Agnin dhanābhyāni vyākhyāta

説受、々者法、

ātma-upādānayoḥ kramah/

及以説瓶衣、

Sarvo niravāgeṣa (p. 212)

一切等諸法。」

sardham ghaṭa pātābhīḥ// (p. 213)

/Durch Feuer und Brennstoff ist die ganze Reihe (krama) von ātman (Selbst) und upādāna

(Angenommenes),

Zugleich mit Krug, Tuch usw., ausnahmslos erklart / (p. 65).

火と薪等に由て我と取等の同と異と相互に觀待(因待)すること(待)を認むべからざる一切の次第は、瓶と繪等と共に残りなく精釋せしことを了解すべきなり。

① 原文 *z-bar-shai-ha* (近取) 梵 *Upādāna* (受) 漢譯 受、本偈譯 *Blai-ba* (ādāna, 取、受)。

② 本偈譯 / *Bum Shan-Sogs Dan Lhan-cig-tu* /

(16) 「何人も我と諸存在との、

かの同と異とを、

説かば、彼等を教義の上にて、

熟達者なりと(我は)思惟せず」。

「若人説有我、  
誰にても我と存在との有如實性  
を

諸法各異相、  
各別異に説くところの

當知如是人、  
號彼等を教への義に

不得佛法味。」  
熟達せるものと我は考へず」。

// *Gain-Dag Dan dNos-po-Rnams/*

// *De-bCas-Nid Dan Tha-Dad-par/*

// *Ston-pa De-Dag bStan-Don-la/*

// *mKhas-po Shan-du Mi-Sens-so//*

// *Ätmanaç ca Satattvam ye* <sup>①</sup>

*bhāvānānī Ca pīṭhake Pīṭhake/*

*Nirdiçanti na tan manye*

*Çāsanasyārtha kovīdān/* // (p. 214)

/Welche das Selbst (ātman) und die Dinge (bhāva) als mit solcher Beschaffenheit und getrennt  
Lehren,

Die halte ich nicht für Kenner des Sinnes der Lehre/ (p. 63).

何人もかの我の同と異と、かの諸存在の同と異とを説かば、彼等は教義の上に於て熟達せるものなりと我は思惟せず。

① 梵文 *satatvānāsa* 有する、含める *antva* 如實性、

阿闍梨耶聖龍樹に依て造られたる「根本中(論)無畏疏」丙、火と薪とを觀すと名けられて、第十品なり (Me Dai Bud-Cin bRtag-pa Shes-Bya-da-Sie Rab-tu-Byed-pa bCu-paho)

「觀本際品」第十一<sup>①</sup> (Pūva-aparākoḥi-parikṣā)

此に問て曰、(p. 165a)

世尊は無始無終經 (Thog-Mla Dan Tha-Mla Med-pahi-mDo) に據るに、「比丘等よ、輪廻に始と終となく、前と後との際は顯かならずと説き給へり、この故に前と後との際は顯かならずと説ひしかば、

ありと説かれたりとは、そは何を思惟して説くや。汝に由て精釋せらるゝこと可なれ。此に答て曰、  
(1)「前際は顯かなるやと問ひまつれるとち、

大牟尼は無しと説き給へり、

//Shon mThah, mNon-Nam Shes Shus-Tshe/  
//Thub-pa Chen-pos Min Shes gSuis/

輪廻に始と終となし、

/hKhor-ba Thog-ma lha Med-De/

そは前もなく後もなし。』

/De-la Shon-Med Phyi-ma Med//

「大聖之所説、

「前際は知られずと、

//Purva prajñāyate kotir

本際不可得、

大牟尼は説き給へり

nety uvāca mahānuṣi/

生死無有始、

生死輪廻は始終なく

Saṁsāro 'navara agro hi

亦復無有終。』

是れの前もなく後もなし。』

na-asya-ādīr nāpi paściman// (p. 219)

Zur Zeit der Frage; „Ist eine frühere Grenze vorhanden?“ wird vom Mahānuṣi gesagt:

„Nein!“

Der saṁsāra ist ohne Oberes und Unteres, da ist nicht Frühestes und Letztes/ (p. 66).

前際は顯かなるや否と問ひまつりしとき、大牟尼は顯かならずと説き給ひしかば、輪廻に始と終とはなし。何故に云ふや、そは前も亦なく、後も亦なきが故なり。(p. 65)こゝに是れを思惟するに、輪廻の中ありとせば、そは又不適當なり。何の故に云ふや。

① 藏文品名「觀輪廻」(Samsāra-puṭīkā, hKhor-ba bRtag-pa)

② 本偈譯 際 (mThah) 且終 (Tha-ma) の 誤寫。

是の如く、

(2) 「何にても始なく終なし、

そは何處にか、中、有らん。」

//Grni-la Thog-Med Tha-Med-pa/ ①

//De-la dBus-ni Ga-la Yod/

「若無有<sub>二</sub>始終

「始なく終なきものに

//Naiva-agrain na-avarani yasya

中當云何有。」 中は何處にかあらん。」

tasya madhyani kuto bhavet/ (p. 220)

/Wenn Oberes nicht ist, Unteres nicht ist, wo ist da Mittleres? (p. 66).

何にても始なく終なし、そは何處にか中あらん。

(3) 「此の故にそこは前後と、

俱(時)に次第は認むべからず。」

/Deji-Phyir De-la Sia Phyi Dan/

/Ihan-Cig Rin-pa Mi-ñThad-Do//

「是破於此中、 「此の故に此處には、

/Tasmān natra-upapadyante

先後共亦無。」 前後同時は不可能なり。」

pūrva-apara-sahakramāh// (p. 221)

/Dashalib treffen da Früheres, Späteres, Gleichzeitiges (Sahakrama) nicht zu/ (p. 66).  
何が故にかの輪廻に始と中と終となし、この故に、そこに前後と俱(時)の次第は認むべからず。そ  
は云何に知らるべしと云ふや。

① 本偈譯「何に於ても始なく際なし」/Can-la Thog-ma in Thab-Nod-pu/

釋して曰、

(3) 「若し生は前にあり、

//Gal-te Skye-ba Sha-Gyur-la/

老死は後にあるならば、

/Rga-Ci hPhyi-ba Yin-Na-Ni/<sup>①</sup>

生は老死もなく、

/Skye-ba Rga-Ci Med-pa Dani/

不死も亦生すべし。」

/A-la-Ci-bar Yan Skye-bar hGyur//

「若便先有生、 「若し前に老死あり、

//Pürvavi jätir yadi bhavaj

後有『老死者、

後に生あるならば、

jarāmaraṇaṇi Uttaravi/

不老死有生、

生は老死を離れ、

Nirjarāmaraṇā jätir

不生有『老死。』 又不死も生すべし。」

bhavej jāyeta ca amṛitaḥ// (p. 221)

/Wenn Geburt früher wäre, Alter und Tod später,

So wäre Geburt ohne Aler und Tod, ohne Tod auch wäre Geburt/ (p. 66).

若し生が前にあり、老死は後ちにあらば、斯くてはかの生に老死なく、前に死せずして、又此處に生する過失に墮すべし。

① 本偈譯 Phyi-Ma: hPhyi-ha (遅れる)、獨譯 später (遅れる)。

又復、

④「若し生は後にあり、

//Gal-te Skye-ba hPhyi-Gyur-Ia/

老死は前にあらば、

/Rga-Ci Sña-ba Yin-na-Ni/

生なき老死は、

/Skye-ba Med-pahi Rga-Ci-Ni/

無因にして云何ぞ(老死)あらんや」

/Rgyu-Med-par-Ni Ji-ltar-hGyur//

「若先有老死、」

//Paṅcāi jātir yadi bhavei

而後有生者、

後に生あらば、

jārammarañam āditah/

是則爲無因、

是れ無因のものなり、

Ahetukam ajātasya avāi

不生有老死。」

不生のもの云何ぞ老死あらんや。」

jāramaraṇāni kathaṇi// (p. 222)

/Wenn Geburt später wäre, Alter und Tod früher,



Wie wäre eines Geburtlosen grundloses Alter und Tod/ (p. 67).

若し生は後ちにあり、老死は前にあるならば、是の如く生なき無因の老死は云何を生せん。

此に問て曰、其れ等に前後なし、そは老死に隨纏するのみにして生ずなり。此に釋して曰、

(5)「生と老死等は、

//Skye-ba Dai-ni Rga-ci-Dag/

俱に適當にあらず、

/Ihan-Cig Rui-ba Ma-Yin-No/

生じつゝあるものが死すべし、

/Skye-bShin-par-Ni hChi-hGyur-Shin/

又(生)二は無因性となるべし」

/gNi-Ga Rgyu-Med-Can-du hGyur//

「生及於老死、 生と老死と

//Na jarāmaṇeṇa eva

不得一時共、

俱に相應せず

jātiḥ ca saha yujyate/

生時則有死、

生じつゝあるものが死すべし

Alriyeta jāyamaṇaḥ ca

是二俱無因。」 又兩無因性に屬すべし」

sayācca-ahetukatā ubhayoh// (p. 223)

/Geburt und Alter-und-Tod sind nicht zusammen (saha) möglich ;

Der Geborenwerdende würde sterben, (und) beides wäre grundlos/ (p. 67).

生と老死とは俱(時)になることは認むべからず。云何に俱(時)になるならば、生じつゝ死すべし、

而して兩者は無因を有するものとなるが故に、そは認むべからず。

① 本偈譯 /Skye-bShin-pa-Na lCh'i-hGyur-Shin/

此に向て曰、其等に前後と俱なる其等の次第は認むべからざるも、亦生老死等あるが故に、それ等は何れも亦我あるなり。此に釋すべし。

(6) 「何にても前後、俱(時)の、

それ等の次第あらざるも、

かの生とかの老死とは、

何が故に戲論するぞ。」

「若使初後共、

「前と後との同時の

是皆不<sub>レ</sub>然者、

其等の生ぜざることを

何故而戲論、

何か故に是れ生なり

謂有<sub>レ</sub>生老死。」

是れ老死なりと戲論するぞ。」

jarāmaraṇaṇi ca kiṇi // (p. 224)

/Wo diese Ordnungen (Krama, Folgen) von früher, später (und) gleichzeitig nicht zutage treten (prabhavanti),

Weshalb projiziert (prapañcayanti) man jene Geburt, Alter und Tod/ (p. 67.)

是の如く正理は前に與へたり。觀察するに、生と老死等に於て(p. 66.)前後と俱(時)の其等の次第あらざるとき、そは何が故にかの生とかの老死とを戲論して説明するや、それ等は認むべからず、何處にか我ありと認むるを得ん。

(7)「因と、果と、

相と 所相と、

受と 受者と、

所有る存在する義とは何ぞ又適せん。」

「諸所有因果、

相及可相法、

受及受者等、

所有一切法。」

/Ursache (Kāraṇa) und Folge (Kārya), Merkmal (Lakṣaṇa) und Merkmalsgrundlage (Lakṣya),

Empfindung (vedanā) und Empfindender (vedaka), und welche Dinge immer (möglich) sind

(所作の)果と(能作の)因と

能相と所相と

受と受者と及び

云何なるものも存在するところの義は」

① //Rgyu Dai hBras-bu-Ñid Dai-Ni/

② //mTshan-ni Dai-ni mTshan-gShi-Ñid/

/Tshor Dai Tshor-po-Ñid Dai-Ni/

/Don Yod Gan-Dag Ci-Yai Run//

//Kāryani ca kāraṇani caiva

④ //Lakṣyāni Lakṣaṇāni eva ca/

⑤ Vedanā vedakaḥ caiva

santya arthā ye ca kecana// (p. 224)

(rmi) : / (p. 68).

云何に觀察するに、生と老死等の前後と俱(時)の次第等は認むべからず、是の如く因と果と、相(能相)と相の事(所相)と、受と受者と所有る他の義と、解脱と涅槃と、知と所知と量と所量等ありと觀察せらるゝ其等一切に、前後と俱(時)の次第は亦認むべからず。

① 本偈譯の第(7)偈と第(8)偈とは、兩者混同せり、下の第(8)偈の註例に於て兩者の原文を擧げて譯出すべし。

② 原文 mTshan (lakṣyaṅ) 能相。

③ 原文 mTshan-gshi(Takṣaṇam) 所相、藏文 *gshi* (根本事)

⑧ 「或輪廻①の前際は、

存せざるのみならず、

諸の存在は又有一切性に於ても、

前際あることなし。」

「兆②俱③於生死、」 「常に生死輪廻の前際は

本際不可得、

存せざるのみならず

//hKhor-ba hBab-Shig Siion-gyi mThaṅ/

/Yod-ma-Yin-pa Ma-Yin-Gyi/ ②

/dNos-Ruams Thams-Cad-Can-Nīd-la Yau/

/Siion-gyi mThaṅ-ni Yod-Ma-Yin//

//Purva na vidyati koṭīṅ

sainśārasya na kevalam/

如是一切法、一切の存在に付ても

Sarveṣāṃ api bhāvānaṃ

本際皆亦無。」前際は見出されず。」

pūrvā koti na vidyate // (p. 221)

/Nicht nur des saṃsāra frühere Grenze existiert nicht,

Anch bei allen Dingen (bhāva) existiert nicht eine frühere Grenze. / (p. 68).

何が故ぞ是の如く如實に従つて觀察するに、一切の存在に於て前後と俱(時)の次第は認むべからず、この故に或輪廻に於て前際存せざるのみならず、一切存在(法物)に於ける所欲にも又前際あることなきが故に、存在に於ける似現 (Snai-ba) は、幻と陽焰と乾闥婆城と影像との如しと感ずなり。

① 無畏疏の(7)と(8)との二偈の次第は、本偈譯に於ては(7)と(8)との兩偈は相互混同す、左に原文と譯文とを例擧すべし。

「或輪廻は前の際は、

// hKhor-la hBaḥ-Shig Sions-gyi mThaḥ/

存在せざるのみならず、

/Yod Ma-Yin-bar Ma-Zad-kyi/

因と果と、

/Rgyu Dan hBras-Bu-Ñid Dan-Ni/

能相と所相と。」

/mTshan-Ñid Dan-Ni mTshan-gShi-Ñid/

「受と受者と、

/Tshor Dan Tshor-po-Ñid Dan-Ni/

所有る存在する義は何ぞ又適せん、

/Don-Yod Gan-Dag Ci-Yan Runi/

諸の存在は又有一切性に於て

/dNos-Rnams Thams-Cad-Ñid-la Yan/

前の際は有るに非ず。」

/Shon-gyi mThaḥ-Ni Yod Ma-Yin//

② 本偈譯 /Yod Ma-Yin-par Ma-Zad-kyri/

阿闍梨耶聖龍樹によりて造られたる「根本中(論)無畏疏」内、輪を觀察すと名けられて、第十二品なり。

(h)Khor-da bRtag-pa Shes-Bya-ba-Ste Rab-tu-Byed-pa bCu-gCig-paḥo)

「觀苦品」第十二 (Dhuhkha-parikṣā)

此に問て曰、或者は苦は自(我 bDag. Svayain) に由て作られ、他 (para, gShan) に由て作られ、共者に由て作られ、無因によりて生ずと謂ふ、この故に是の如く苦あるなり。此に釋して曰、

①「或者は苦は自(我)に由て作られ、(p.66b)

他に由て作られ、共者に由て作られ、

無因より生ずと謂ふ、

そは所作(果)に於て不相應なり。」

「自作、及他作、

共作、無因作、

如是説諸苦、

「苦は自にて作られたるもの、

他にて作られたるもの、共に作られたるもの、

無因なるものと或人々は謂ふ、

/De-ni Bya-bar Mi-Rui-Ōo//

//Svayain-kyitain parakritain

dvābhyāni-kyitain abhutukain

Duhkham ity eka icchanti

於果則不然。」その果は相應せず。」

tacca kāryain na yujyate // (p. 227)

/Manche nehmen das Leid als selbst gewirkt an, als durch anderes gewirkt, als durch beides gewirkt,

Als grundlos entstanden; es ist aber nicht als Wirkung möglich/ (p. 69).

此に或者は苦は自(我)に由て作らると謂ひ、或者は他に由て作らると謂ひ、或者は自(bDag)と他(gShan)との共者に由て作らると謂ひ、或者は無因より生ずと謂へり。そは是等の四(種)の次第の何れに由ても亦所作(果)ありとは不合理なり、こゝに是れを思惟するに、何れの正理に由るも所作(果)ありとは不合理なるや。

① 梵文 svayam—self, myself, ones self 藏文 bDag (ātman)

此に釋すべし。

② 「若し自(我)に由て作られしものならば、

//Gal-te bDag-gis Byas-Gyur-Na/

それ故に縁(起)より生ぜんるべし、

/De-Phyir bRten-Nas hByun Mi-hGyur

何故ならば此の諸蘊に、

/Gain-Phyir Phun-po hDi-Dag-La/

縁りて彼の諸蘊は生ず。」

/bRten-Nas Phun-po De-Dag hByun//

「苦若自作者、若し自の所作にてあらば、

//Svayam-kritam yadi bhavet

則不從緣生、

緣(起)にて成れるものにあらざ

① pratyā na tato bhavet/

因有此陰故、

何となれば此の諸蘊に緣りて

② Skandhān imān amī skandhān

而有彼陰生。」

彼の諸蘊は生起するが故に。」

sambhavantī pratyā hi// (p. 228)

/Wenn es durch sich selbst gewirkt wäre, so wäre es nicht abhängig (pratyā) entstanden;

Weil von diese skandhas abhängig jene skandhas entstehen/ (p. 69).

若し苦が自に由て作らるゝならば、斯くては緣(起)より生ぜざるべし。(されど)亦緣より生ず。何の故とならば、現在の此の諸蘊に緣りて彼の未來の諸蘊は生ずべし、是の故に苦は自に由て作らるゝとは不合理なり。

此に問て曰、苦は自に由て作られざるも、亦他に由て作らるべし。云何に然るや。何故となれば他に轉變せる此の諸蘊に緣りて彼の諸蘊は生ずるが故に。

① 梵文 Pratyā-dṛken-Nas(緣りて、緣「起」)

② 梵文 Skandhā-Phuā-po 蘊「陰」一五蘊。

此に釋すべし。



(3) 「若し彼より此は異り、

若し此より彼は異ならば、

彼等の他に由て此は作られしが故に

苦は他によりて作らるべし。」

「若謂此五陰、

「若し此(陰)が彼(陰)より異ならば、

異彼五陰者、

或若し彼(陰)が此(陰)より異ならば、

如是則應言、

苦は他の所作のものなるべし、

從他而作苦。」

是等の他(陰)によりて彼(陰)は作られたり、

/Wenn diese andere als jene sind, wenn jene andere als diese sind, (p. 69)

Dann wäre, weil durch jene andere diese entstanden sind, das Leid durch anderes gewirkt/

(p. 70).

若し彼の未來の諸蘊より此の現在の諸蘊は異り、此の現在の諸蘊より亦彼の未來の諸蘊は異らば、斯くては彼の現在の諸蘊によりて此の未來の他蘊は作らるべしか故に、苦は又他に由て作らるべし。何故ぞ是の如くならず、此の故に苦は他に由て作らるべしとは認むべからず。

此に問て曰、苦そのものに由て苦は作らるべし故に、この故に苦は自(我)に由て作らるべしなりと

① //Gal-te De-I-as hDi gShan-Shin/

/Gal-te hDi-I-as De gShan-Na/

/gShan De-Dag-gis hDi Byas-pas/

/Sdu-g-bSial gShan-gyis Byas-par-hByur//

//Yady amblhya ime 'anye syur

ebhayo vā-ami pare yadi/

Bhavet parakṛitani duḥkhaṇi

parair ebhir ami kṛitāḥ// (p. 229)

は亦言ふべからず。苦は因と縁(Rkyen, 條件)とより生ずるが故に、此の故に苦は他によりて作らるなりとは亦言ふべからず。苦は自(我)の補特伽羅に由て作らるゝが故に、此の故に應に苦は自によりて作らるなりと亦言ひ、苦は他の補特伽羅に由て作らるゝが故に、此の故に苦は他に由て作らるゝなりと亦言ふなり。

① 本偈譯と無畏疏偈との相異は左の如し。

「若し此より彼は異り、

若し彼より此は異らば、

苦は他に由て作らるべし、

彼等の他に由て此は作らるべし。」

//Gal-te hDi-las De gShan-Shiñ/

/Gal-te De-las hDi gShan-Na/

/Sdag-bSñal gShan-gyis Byas-hGyur-Shiñ/

/gShan De-Dag gyis De Byas-hGyur//

此に釋すべし。

④「若し自(我)の補特伽羅に由て、

苦が作られば、彼の自に由て、

苦が作らるとも、補特伽羅は、

苦はなし、そは何なるや。」

「若人自作苦、

「若し苦が自の補時伽羅によりての所作ならば、

//Gal-te Grān-Zag bDag-gis-Ni/

/Sdag-bSñal Byas-na Grān bDag-gis/

/Sdag-bSñal Byas-pahi Grān-Zag-Ni/

/Sdag-bSñal Med-pa De Grān-Yin//

//Svapudgalakṛitān duḥkhaṇi

離苦何有人、 苦を離れて更に自の補特伽羅あり、 Yadi dukkhanī punar vīna/

而謂於彼人、 彼によりて苦が自ら作られると云ふの、 Svapudgalaṅ sa katamo

而能自作苦。』 彼(自の補特伽羅)とは何なるぞ。』 yena dukkhanī svayaṅī kīraṇī // (p. 230)

/Wenn durch den eigenen pudgala das Leid gewirkt ist,

Welcher ist dann jener pudgala ohne Leid, durch den selbst das Leid gewirkt ist? (p. 70).

若し自の補特伽羅に由て苦蘊は作らるゝと思惟せば、誰によつて彼の苦は作らるゝとも、彼の補特伽羅によりては彼の苦は作られず、されど先に作りし補特伽羅に苦はなし、そは誰なるや、そは此なりと説明を要するとも、そは亦無きが故に、此の故に苦は自の補特伽羅によりて作られたりと云ふ、これは認むべからず。

① 補特伽羅(pudgala, Gan-zag) 漢譯人。

② 本偈譯「苦は除かる、そは何なるぞ」/Sdug-bSial Ma-gTogs Gan Shig Yin/

他の補特伽羅に由て苦は作らるゝなりと誰か言ふや、又それに付て釋すべし。

⑤「若し他の補特伽羅より、 //Gal-te Gan-Zag gShan-las-ni/

苦は生せば、他に由て、 /Sdug-bSial Byuṅ-na gShan-Shig-Gis/

その苦は作らる、かの與ふるものは、  
/Sdug-bSial De-Byas Gan-Sbyin De/  
苦なくして云何そ適當ならん。① /Sdug-bSial Med-par Ji-Irar Run//

「若苦他人作、」 「若し苦が他の補特伽羅より生せば、  
//Parapudgalajani duhkhanī

而與此人者、 その人にまて其(苦)が與へられん、 yadi yasmai pradiyate/

若當離於苦、 その苦は他に由て作られ Pareṅa kṛivā tad duhkhanī

何有此人受。① 苦を離れて何ぞ有らんち sa duhkkena vinā kutah// (p. 231)

/Wenn aus einem anderen pudgala das Leid entsteht, wie ist der, welcher das durch anderes gewirkte Leid wegnimmt, ohne Leid möglich?/ (p. 70).

若し他の補特伽羅に由て苦蘊は作られ、彼に由て此は作られ、他に與ふなりとせば、かの與ふる者によりて此は作られ、誰に與へらるとも、彼に與へられざる先に於て受くべき補特伽羅に苦なし、そは誰なるや。そは此れなりと説明を要するとも、そは又なきが故に、此の故に苦は他の補特伽に由て作らるなりと云ふ、そは又認むべからず。

① 本偈譯「苦は除かる、云何そ適せん」/Sdug-bSial Ma-yTogs Ci-Irar-Ruñ/

⑥「若し他の補特伽羅が苦を、」  
//Galte Gan-Zag gShan-Sdug-bSial/

生せば誰か其を作ることによりて、

/hByuñ-na Gan-gis De Byas-Nas/

他に與ふるとも、他の補特伽羅は、

/gShan-la Ster-baḥi Gan-Zag gShan/

苦は除かる、(そは)何なるぞ。」

/Sdug-bSñal Ma-gTogs Gan-Shig-Yin//

「苦若彼人作、

「苦が他の補特伽羅より生せば、

//Parapudgalajam duḥkhañi

持與此人者、

何をか補特伽羅なるか、

yadi kaḥ parapudgalah/

離苦何有人、

そは苦を離れて作るとするの、

Vinā duḥkhena yaḥ kṣitvā

而能授於此。」

他にまて渡す他の補特伽羅とは何ぞや。」

parasmai prahñoti tat// (p. 231)

① 無畏疏には此の(6)偈は缺、本偈譯に據つて補入す。

又復、

(7)「自に由ての所作は成立せざるが故に、

//bDag-gis Byas-par Ma-Grub-pas/

苦は他に由て何處にか作られん、

/Sdug-bSñal gShan-gyis Ga-la-Byas/

他に由て作らる其の苦は、

/gShan-gyis Sdug-bSñal Gan Byed-pa/

そは彼の自の所作なるべし。」

/De-ni Deḥi bDag Byas-ñGyur//

「自作若不成、

「自の所作の苦が成立せざるべし

//Svayantikīṭasya-aprasiddher

云何彼作苦 他が作るであらうとの意の、

duḥkhaṇi prakṛitaṇi kutaḥ/

若彼人作苦 其の苦は彼に取つては、

Paṇo hi duḥkhaṇi yat kurvat

卽亦名自作。 自の所作なるべし。

tat tasya syāt svayamkṛitaṇi// (p. 232)

Wenn selbstgewirktes nicht erreicht wird, woher ist Leid durch anderes gewirkt?

Dar Leid, das durch einen anderen gewirkt ist, das wäre durch eben den selbst gewirkt?/

(p. 71).

自に由て苦を作らることは能く成せざるが故に、(p. 57b) 苦は他に作らるべく何處にかあらん。何が故に然るや。他に由て苦は何を作らることも、それは彼の自に由て作られたものならば、それは又初の正理に由て、能く觀察するとき、苦は自の補特伽羅に由て作らるを認むべからざるが故に、この故に苦は補特伽羅に由て作らることを成せず、他に由て作らることも亦認むべからず。

此に問て曰、かの苦よりかの補特伽羅は異ならざれば、苦に由て苦は作らるゝが故に、法門によつて亦苦は自に由て作らるなりと云へど、かの凡ての苦そのものは補特伽羅に非ざるが故に、法門によりて亦苦は他に由て作らるなりと云ふなり。

(8) 「應に苦は自の所作に非ず、

彼自身に由ては彼れを作らず。」

/De-Ñid-kyis-ni De Ma-Byas/

「若<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>自作」

//Na tavat svakitain duñkhan

法不<sub>レ</sub>自作法。」

何となれば彼が彼自身によつて作らざるが故に。

na hi tenaiva tat kitanū/

/Das Leid ist eben nicht selbstgewirkt, denn durch das ist eben das nicht gewirkt/ (p. 71).

應に苦は義に従ひ自に由て作らると云ふ、そは認むべからず。何の故に然るや。其自身に由ては彼を作らざるが故なり。苦は義に従ひ他に由て作らるなりと云ふ、そは又伺察すべきなり。

(8)「若し他が自を作らざれば、

/Gal-te gShan bDag Ma-Byas-Na/

他作の苦は何處にかあらん。」

/Sdag-bSñal gShan Byas Ga-la-ñGyur//

「彼無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>自體

「若し他が自作ならざれば

/Paro na-ātmanakriyaḥ cet

何有<sub>レ</sub>彼作者。」

syād duñkhan prakritain kathain// (p. 232)

/Wenn anderes nicht selbstgewirkt ist, woher ist durch anderes gewirktes Leid/ (p. 71).

他に由て作られたりと云ふかの執着も、亦若し他自らに由て作らず、成せざるならば、かの苦は他に由て作らることは何處にかあらん。

此に問て曰、苦は自と他との二者集りて作らるゝことあり。此に釋すべし。

(9)「若し各々に由て作られば、

//Gal-te Re-Res Byas Gyur-Na/

苦は二(共)によりて作らるべし。」

/Sdug-bSial gÑi-Gas Byas-par-ñGyur/

「若此彼苦成、

〔若し一々によりて作られたる  
(苦)あらば〕

/Syād ubhābhayāni-kṛtāni dhūḥkhaṇi

應有共作苦。」

(自他)の共によりて作られる苦  
あるべし。

syād ekaika-kṛtāni yadi/ (p. 233)

/Wenn es durch jedes eingeln gewirkt wäre, so wäre Leid durch beides gewirkt/ (p. 72).

若し各々に由て作らるゝことあらば、苦は二(共)によつて作らるべし、それど何が故ぞ是の如くあらす、この故に苦は又自と他との二(共)集ることに由て作らるゝこととなし。

此に問て曰、是の如く自と他と二(共)とに由て作らるゝこと正しからず、ならば苦は無因より

(p. 68a)生ずべし。此に釋すべし。

(9)「他に由て作られず自にても作られず、

① //gShan-gyis Ma-Byas bDag Ma-Byas/

無因の苦は何處にか成せん。」

/Sdug-bSial Rgyu-Med (ra-la-ñGyur//

「此彼尙無作、

「他は作らず、自も作らず、

/Parākāra-asvayaukāraṇi

何況無因作。」

何ぞ無因の苦あらんや。

duḥkham ahetukaṇi kutah// (p. 233)

/Nicht durch anderes gewirkt, nicht durch sich selbst gewirkt, woher wäre Leid grundlos?/ (p. 72)

此の如く他に由ても亦作られず、自に由ても亦作られずとせば、苦は無因より生ずること何處に



か認むべきや。そは大過失に墮すればなり。

① 本偈譯「自に由ても作られず、他にても作られず」/bDag-g's Ma-Byas gShan Ma-Byas/

(10) 「唯苦は四種にして、

有らざるのみならず、

//Sdug-bSnal bBaḥ-Shig Rnam-pa bShi/

/Y'od Ma-Yin-pa Ma-Yin-Gyi/

外の諸存在に於ても亦、

/Phyi-Rol dÑos-po Rnams-la Yan/

四種は有ることなし。」

/Rnam-pa bShi-po Y'od-Ma-Yin//

「非但説於苦」

//Na kevalam hi duḥkasya

四種義不成、

四句は存せざるのみならず、

cāturvidhyam na vidyate/

一切外萬物、

亦外の諸の存在に付ても

Bāhyānam api bhāvānām

四義亦不成。」

cāturvidhyam na vidyate// (p. 233)

/Nicht nur beim Leid existieren nicht die vier Arten,

Auch bei den äusseren Dingen existieren nicht die vier Arten/ (p. 72).

唯苦蘊に於て、自と他と二(共)と、無因とより生せる四種は存在せざるのみならず、外(界)の諸の色等の存在に於ても、又四種あることなし。

① 本偈譯 /Yod-na Yin-pa Na-Zad-kyi/      Zad-pa (㊦ み、總 つ)、Na-Zad-kyi(㊦ みならず尙)

阿闍梨耶聖龍樹によつて造られたる「根本中(論)無畏疏」内、苦を觀すと名けられて、第十二品なり」  
(Sdug-bśnal bKtag-pa Shes-Bya-ba-Ste Rab-du-Byed-pa bCu-g<sup>7</sup>Ńis-Paho)